

エソ科アカエソ属の *Synodus lautus* と *Synodus usitatus* に適用された標準和名

古橋龍星¹・本村浩之²

Author & Article Info

¹ 鹿児島大学大学院連合農学研究科 (鹿児島市)

k4596558@kadai.jp (corresponding author)

² 鹿児島大学総合研究博物館 (鹿児島市)

motomura@kaum.kagoshima-u.ac.jp

Received 16 May 2025

Revised 17 May 2025

Accepted 19 May 2025

Published 20 May 2025

DOI 10.34583/ichthy.55.0_49

Ryusei Furuhashi and Hiroyuki Motomura. 2025. On standard Japanese names of *Synodus lautus* and *Synodus usitatus* (Synodontidae). Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 55: 49–51.

Abstract

Furuhashi and Motomura (2025) described *Synodus lautus* as a new species, previously identified as *S. usitatus*, from Japan, and redescribed *S. usitatus* from the Hawaiian Islands. They also proposed “Haregi-eso” as a new standard Japanese name for *S. lautus* and adopted “Ushi-eso” as standard Japanese name for *S. usitatus*. The detailed reasons and grounds for this allotment however were not given in Furuhashi and Motomura (2025) which are provided in this report.

Synodus usitatus Cressey, 1981 はハワイ諸島産3標本(ホロタイプとパラタイプ)と日本産1標本(パラタイプ)に基づき新種として記載され、本種には標準和名としてウシエソが適用されていた(山田, 2000; 山田・柳下, 2013; 本村, 2025)。しかし、Furuhashi and Motomura (2025) はハワイ諸島産と日本産の *S. usitatus* がそれぞれ別種であり、ハワイ諸島に分布する種が真の *S. usitatus* であることを明らかにした。同時に、日本に分布する種は *Synodus lautus* Furuhashi and Motomura, 2025 として新種記載された。また、彼らは *S. lautus* の新種記載の際に、本種の標準和名としてウシエソを適用すべきではないとして、*S. lautus* に対して新標準和名ハレギエソを提唱した。従来であれば日本産魚類の学名に変更が起きても標準和名は日本産種に対して与えられているため、基本的に日本産種には従来使用されていた和名が適用される。しかし、Furuhashi and Motomura (2025) は標準和名ウシエソを日本産種 (*S. lautus*) に適用

せず、*S. usitatus* に適用する見解を示した。Furuhashi and Motomura (2025) はこの経緯について詳細を省いていたため、上述の対応となった経緯についてここに詳述する。

材料と方法

本稿で用いた標本はビショップ博物館 (BPBM)、京都大学総合博物館 (FAKU)、および鹿児島大学総合研究博物館 (KAUM) に所蔵されている。また、本稿で用いた標本のデータや種の計数・計測値、および特徴は Furuhashi and Motomura (2025) に詳述されている。標準和名を検討するにあたっての理念や規範は日本魚類学会標準和名検討委員会(2020)に準拠した。「日本産魚類検索 全種の同定」(中坊, 1993)、「日本産魚類検索 全種の同定. 第2版」(中坊, 2000)、および「日本産魚類検索 全種の同定. 第3版」(中坊, 2013) はそれぞれ「初版」、「第2版」、および「第3版」と表記した。

標準和名適用の経緯

和名ウシエソは「初版」の正誤表(1995年6月9日発行)において、*S. usitatus* に対し、初版のエソ科を担当した山田(1993)で提唱されたジミナエソ(新称)を修正する形で初めて登場した。ただし、ウシエソに対して新称や改称、および学名の表記はなく、ジミナエソからウシエソへの変更理由は不明である。その後、「第2版」、「第3版」を含め、長らくウシエソは *S. usitatus* の標準和名として使用されてきた。なお、ウシエソ = *S. usitatus* という対応が初めて明記されたのは、第2版のエソ科を担当した山田(2000)である。

ジミナエソとウシエソの名前の由来については、初版の正誤表や第2版には記述されておらず不明である。しかし、両和名は次の理由から対応する学名の種小名 (*usitatus*) に基づくものと考えられる。本学名の命名を行った Cressey (1981) は、*usitatus* (ラテン語) に (ordinary) と英訳を付記しており、これは「普通の」「通常の」「普段の」「一般的な」「目立たない」「平凡な」などを意味する。したがって、ジミナエソは「地味な」という日本語に由来す



Fig. 1. Photographs of holotypes of *Synodus lautus* (A: KAUM-I. 198945, 142.1 mm SL, Japan, fresh) and *S. usitatus* (B: BPBM 15484, 131.6 mm SL, Hawaiian Islands, preserved).

ると推察され、ordinaryの意味と整合性が取れる。また、ウシエソの「ウシ」は動物の牛を簡単に連想させるが、*S. usitatus*には牛に関連する特徴や背景はなく、採集地名や採集者名などにも関連性がないため、これは*usitatus*の前方部分を単にカナ表記に変換したものであると推察される。

和名がどの種に対して与えられたかについては、標準和名提唱の基準となった1標本に基づき判断すべきであるが、ジミナエソとウシエソには基準標本が指定されていない。このような場合、日本産種(*S. lautus*)がウシエソという和名で広く認知されており、混乱なく普及していれば*S. lautus*=ウシエソとなる。しかし、以下の背景により、そのように見なすことは困難である。

第一に、国内における*S. usitatus*の証拠を伴う記録は、FAKU 5780に基づくCressey (1981)に限られ、その他の主要な出版物における記録(山田, 1993, 2000; Yamada, 2002; 山田・柳下, 2013)は、いずれもCressey (1981)の引用に過ぎない。つまり、一般的には“従来の”ウシエソ(=“*S. usitatus*”)が日本に分布している認識は薄く、“*S. usitatus*”は日本国内において過去に1例の記録があるだけの実体が不明瞭な種であるという認識が強いと言える。

第二に、これまで日本産種である*S. lautus*の写真や図などが出版物に掲載されたことはないため、ウシエソという和名を提示された際に*S. lautus*を想像する可能性は非常に低い。実際、*S. lautus*よりむしろ写真や図が複数の

出版物に掲載されている真の*S. usitatus*を目にする機会の方が多いため(Cressey, 1981; Waples and Randall, 1988; Randall, 2007)。以上から、ウシエソに適用すべき学名は、標準和名の基準となる標本が指定されていない場合での一般的な判断では決めることが出来ず、ウシエソ=*S. lautus*あるいはウシエソ=*S. usitatus*のいずれとも断定出来ない。

そこで、本研究では日本産魚類の標準和名の起点である「第2版」、すなわち同文献のエソ科を担当した山田(2000)に基づき、ウシエソに適用すべき学名を検討した。まず、山田(2000)が示したウシエソの特徴は、Cressey (1981)を参考にしているため、2種(日本産種の*S. lautus*と真の*S. usitatus*)の特徴が混在しており(Furuhashi and Motomura, 2025)、判断が不可能である。一方、同文献で掲載された*S. usitatus*の全体図は、Cressey (1981)が示したホロタイプ(BPBM 15484)のスケッチの略写である(初版と第3版も同様)。したがって、第2版に掲載されたウシエソの全体図は、紛れもない*S. usitatus*であるため、標準和名「ウシエソ」は*S. usitatus*に対して与えられた和名であると判断するのが妥当である。また、「ジミナエソ」はウシエソの改称前の和名とみなされることから、本和名も*S. usitatus*に適用される。

以上の理由により、標準和名「ウシエソ」は*S. usitatus*に適用すべきであり、*S. lautus*には適用すべき標準和名がないと判断し、Furuhashi and Motomura (2025)は後者に新標準和名ハレギエソを提唱した。そして標準和名ウシエソ

はハワイ諸島に分布する *S. usitatus* に対する和名として適用される。また、ウシエソとハレギエソの標準和名の基準標本はそれぞれ BPBM 15484 (*S. usitatus* のホロタイプ) と KAUM-I. 198945 (*S. lautus* のホロタイプ) となる。

ハレギエソの和名は本種の明るい体色が日本では特別な日に着る「晴れ着」を連想させることに由来し、種小名 (*lautus*) も「華やか」を意味するラテン語である (Furuhashi and Motomura, 2025)。なお、ウシエソの種小名 (*usitatus*) は上述の通り「通常の」「普段の」「一般的な」などの意味をもち、晴れ着と対照的な存在である褻着 (けぎ) を連想させる。

備考 ハレギエソ *Synodus lautus* はウシエソ *S. usitatus* によく類似するが、前鼻孔皮弁が円いか三角で短く、前鼻孔皮弁長 (実測値) の鼻孔間隔 (実測値) に対する比が 0.33–0.75 であること (ウシエソでは皮弁が細長い三角か葉状で、比が 0.71–1.30)、第 1 鰓弓前面の鰓耙数が 30–38 であること (25–36)、擬鰓数が 21–28 であること (16–27)、腹鰭がやや短く、体長に対する腹鰭長が 21.6–24.0% であること (やや長く、22.8–27.2%)、側面から見た吻端がやや尖ること (丸い)、および尾鰭上葉に白色帯がないこと (上葉に複数の白色帯がある) により識別される (Furuhashi and Motomura, 2025)。また、前者はこれまで日本近海から、後者はハワイ諸島からのみ標本が得られており、両者は異所的に分布するそれぞれの地域の固有種と考えられる (Furuhashi and Motomura, 2025)。

謝 辞

Ichthy 担当編集委員の藤原恭司氏には本稿の改訂に際して適切な助言をいただいた。本研究は鹿児島大学総合研究博物館の「鹿児島・琉球列島の魚類多様性調査プロジェクト」の一環として行われた。本研究の一部は公益財団法人日本海事科学振興財団「海の学びミュージアムサポート」、JSPS 研究奨励費 (DC1: 23KJ1779)、JSPS 科研

費 (20H03311・21H03651・23K20304・24K02087)、JSPS 研究拠点形成事業—B アジア・アフリカ学術基盤形成型 (CREPSUMJPJSCCB20200009)、文部科学省機能強化費「世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローバル教育研究拠点形成」、および鹿児島大学のミッション実現戦略分事業 (奄美群島を中心とした「生物と文化の多様性保全」と「地方創生」の革新的融合モデル) の援助を受けた。

引用文献

- Cressey, R. F. 1981. Revision of Indo-West Pacific lizardfishes of the genus *Synodus* (Pisces: Synodontidae). *Smithsonian Contributions to Zoology*, 342: i–iii + 1–53.
- Furuhashi, R. and H. Motomura. 2025. A new species of *Synodus* from southern Japan, with a redescription of *Synodus usitatus* Cressey 1981 (Teleostei: Aulopiformes: Synodontidae). *Ichthyological Research*, doi: 10.1007/s10228-025-01025-y (16 May 2025).
- 中坊徹次 (編). 1993. 日本産魚類検索 全種の同定. 東海大学出版会, 東京. xxxiv + 1474 pp.
- 中坊徹次 (編). 2000. 日本産魚類検索 全種の同定. 第 2 版. 東海大学出版会, 東京. lvi + 1748 pp.
- 中坊徹次 (編). 2013. 日本産魚類検索 全種の同定. 第 3 版. 東海大学出版会, 秦野. xlix + 2530 pp.
- 日本魚類学会標準和名検討委員会. 2020. 魚類の標準和名の命名ガイドライン. [URL](#) (1 Mar. 2025)
- 本村浩之. 2025. 日本産魚類全種目録. これまでに記録された日本産魚類全種の現在の標準和名と学名. Online ver. 31. [URL](#)
- Randall, J. E. 2007. Reef and shore fishes of the Hawaiian Islands. Sea Grant Program of the University of Hawai'i, Honolulu. xiv + 546 pp.
- Waples, R. S. and J. E. Randall. 1988. A revision of the Hawaiian lizardfishes of the genus *Synodus*, with descriptions of four new species. *Pacific Science*, 42: 178–213, pls 1–3.
- 山田梅芳. 1993. エソ科, pp. 309–313, 1272–1273. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 東海大学出版会, 東京.
- 山田梅芳. 2000. エソ科, pp. 351–358, 1485–1486. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第 2 版. 東海大学出版会, 東京.
- Yamada, U. 2002. Synodontidae. Lizardfishes, pp. 412–420, 1846–1847. In Nakabo, T. (ed.) *Fishes of Japan with pictorial keys to the species*. English edition. Tokai University Press, Tokyo.
- 山田梅芳・柳下直己. 2013. エソ科, pp. 412–420, 1846–1847. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第 3 版. 東海大学出版会, 秦野.